

レクリエーション・スポーツクラブの活動状況と意識に関する事例研究

ークラブ活動への参加状況と加入状況による意識の違いについて一

長岡 雅美 (武庫川女子大学) 永松 昌樹 (大阪教育大学) 宮崎 千枝 (大阪体育大学大学院)

1. はじめに

「総合型地域スポーツクラブの育成」は、少子高齢化社会の進展、生活環境の利便化に伴う身体活動の不足、コミュニティ感情の希薄化などを背景に、誰もが主体的、継続的にスポーツを親しむ環境づくりの一つとして進められている事業である。文部省や財団法人・日本体育協会などが中心となって、市町村ごとにモデル事業が実施されてきた。文部省は総合型地域スポーツクラブの育成について、①既存スポーツクラブの集合、②スポーツ少年団のビルドアップ、③体育協会や競技団体の協力、④体育指導委員等のスポーツ指導者への呼びかけ、⑤社会教育団体の協力など、いくつかの形態から発展させるとしているが、あくまでも地域住民の自主的・自発的な意思に基づくものとしている。そしてクラブ設立のメリットとして①地域住民による自主的運営、②拠点となる施設の保有、③多項目活動の可能性、④指導者資格保有者の有効活用、⑤多様な世代による交流、⑥地域住民の交流をあげ、人々の健康・体力増進だけでなく潜在的なスポーツ実施者を呼び起こそうという狙いをあげている。

一方、兵庫県では、「地域スポーツ活動支援事業」の一つとして「スポーツクラブ 21 ひょうご」という事業が展開されることとなった。これは法人県民税超過課税による文化・スポーツ・レクリエーションの推進事業 (Culture Sport Recreation : CSR 事業) で行われてきた施設の整備等について、第 5 次延長 (平成 12 年～平成 16 年) によって財源を活用し、地域のスポーツ組織の活動を支援しようというものである。この背景には、少子高齢化の進展など、子供たちを取り巻く社会的な環境の著しい変化がみられる中、地域や家族の教育力が低下しており、社会で生きていくために必要な規範意識の欠如、また、「いじめ」・「不登校」・「校内暴力」等の緊急かつ重要な教育課題が提起されていることがあった。そこで、これらの課題に向けて地域社会の教育力を活用しつつ、CSR 活動拠点施設を含む既存公的施設等の効果的な活用や学校週 5 日制の実施等も勘案し、地域のスポーツ組織を支援したいとしている。すべての県民が小学校区を基本単位として地域におけるスポーツ活動を主体的かつ継続的に参加することができる環境を整え、これらの活動を通じて親子や地域の人々とのふれあいを促進するとともに、青少年の健全育成を図り、県民の健康保持増進にも寄与しようという狙いが示されている。

このような動きを受けて、地域において実際に複合型あるいは総合型の地域スポーツクラブを発展させようとする場合、どのような運営組織にするのか、どの程度の規模にするのかなど取り組む課題は多い。また、既存スポーツクラブはその多くが単一種目型であり、それらが複合型あるいは総合型地域スポーツクラブに発展していく可能性はあるのか、さらに一歩踏み込んで考えるならば、クラブの設立理念やクラブの活動・運営状況などによっては、既存クラブが「地域スポーツクラブの支援」を必ずしも望んでいるとは限らないし、そのような状況下においてそれらのクラブを発展させる必要があるかどうかという議論も必要となるであろう。

地域スポーツクラブの育成事業が進められる中で、既存スポーツクラブの現状、とりわけ中高年者が所属しているクラブを対象にして現状を把握し、適切なクラブ育成の方法や方向性について検討することが必要であろう。本研究では、既存クラブの現状として「クラブへの参加状況」ならびに「クラブへの加入状況」によるクラブ活動の行動意識の違いについて検証することにした。

2. 研究方法

アンケート調査の設計は、財団法人・日本体育協会によってまとめられた「総合型地域スポーツクラブ育成」に関する報告書に記載されていた内容について吟味したのち、今回の調査対象となったクラブの特質に合った項目に設定することとした。具体的には「基礎的属性（性別、年齢、活動年数、クラブ加入状況、参加状況）」、「クラブへのアプローチ要素（活動の目的、クラブ選択の理由、入会のきっかけ）」、「クラブ活動・運営に関わる諸条件の評価と期待」、そして「継続意思とクラブの将来像」の5つの大きな項目に分類できよう。

調査対象は、芦屋市レクリエーション・スポーツ協会に登録している17団体のうち研究調査への協力依頼に対して承諾を得られた14団体である。アンケート用紙の配布数は490枚で、芦屋市レクリエーション・スポーツ協会理事会に出席した14クラブの代表者を通してクラブ員へ手渡してもらい、回収についても各クラブでまとめ、クラブの代表者に理事会の際提出してもらった。調査期間は、2000年7月4日～7月31日とした。

アンケートの回収数は413枚であったが、回収されたアンケートのうち1枚は小学校低学年のクラブ員が記入しており、回答数が極端に少なかったため分析対象から除外することとした。有効回答率84.1%であった。分析は回収された調査書をパーソナルコンピュータ上でSPSS ver. 10jを用い、度数分布表をもとに統計量を算出した。さらに「クラブへの参加状況（「無休群…休むことなくクラブ活動に参加している」と「有休群…休むことがしばしばある」）ならびに「クラブへの加入状況（「複数加入群…複数のクラブに所属している」と「単一クラブ群…一つのクラブだけで活動している」）の二つの比較に際し、クロス集計と平均値の差の検定、さらに因子分析を用いた。

3. 結果と考察

単純集計から求められた分析対象にみる特徴は、女性の割合が非常に高く、全体の92.5%を占めた。クラブ員の年齢は最年少者10才、最年長者89才で、その年齢差は大きいとみられると60才代が47.8%と最も高い割合を占め、平均年齢は63.1才であった。活動年数では最も短期のクラブ員が1ヶ月、最も長期のクラブ員は35年であった。活動年数は1年以上10年未満のクラブ員が全体の51.2%で最も高く、クラブ員の平均活動年数は9.3年であった。活動年数1年未満のクラブ員は全体の16.2%で8割以上が1年以上活動を続けている。クラブへの加入状況は、複数のクラブに所属している人は30.1%、1つのクラブのみに所属している人は69.9%で、半数以上は単一クラブでの活動をしている。参加状況については、「休むことなく参加している」という回答が全体の61.4%と最も高い割合を示した。以下多かった順に「時々休むことがある」(33.7%)、「休むことがしばしばある」(3.2%)となった。

3-1. 「無休群」と「有休群」

「有休群」は参加状況への回答のうち「時々休むことがある」「休むことがしばしば」と回答した152名で、分析対象(405名)のうち37.5%であり、「無休群」は「休まず参加している」と答えた253名(62.5%)である。「加入しているクラブの良いところは何か?」に関する18項目において、クラブ員が認められた内容についてクロス集計を行った。(χ²乗検定)。「無休群」が「有休群」に比して有意に高い差異が認められた項目は、「活動が定期的である」「いろいろな世代の人と活動ができる」「試合や発表会に出場できる」「種目の大会や発表会などの情報提供を受けることができる」「クラブの仲間と食事や会話を楽しむことができる」の5つの項目であった。

さらに「クラブへのアプローチ要素」として用いた、「活動目的(5項目)」「クラブ選択の理由(3項目)」「入会のきっかけ(5項目)」「いずれも5段階尺度」への該当状況を点数化(5点~1点)し、その平均値を二つの群ごとに算出し比較を実施した(平均値の差の検定)。いずれの項目においても「無休群」が「有休群」より平均値が高く、有意水準(5%)を満たす差異が認められた項目は「試合や発表会に出場する」「仲間との交流」「技術の向上」「気晴らし・楽しみ」「身体を動かしたい」「このクラブで行う種目に興味を持っていた」「レク・スポ協会主催の教室事業への参加」の7項目であった。ここまでの2つの分析結果から「無休群」は「有休群」に比して「クラブ活動への積極性」が強く、「発表の場」や「交流の場」としてクラブ活動への魅力を感じている状況が示唆される。

「無休群」と「有休群」の「クラブへのアプローチ要素」を構成要因の違いから確認するため因子分析を実施したところ、「無休群」では5つの因子に、「有休群」では4つの因子に分類された。「無休群」の第一因子は、「芦屋市などの広報誌等による案内」「クラブ活動の見学や体験入学」「レク・スポ協会の教室主催事業への参加」「家族からのすすめ」といった項目から成る『外的情報』因子、第二因子は「友人やクラブの仲間と一緒に楽しむことができる」「気晴らし・楽しみ」「仲間との交流」といった項目から成る『人的交流』因子、第三因子は「技術の向上」「試合や発表会に出場する」といった項目から成る『技能発展』因子、第四因子は「身体を動かしたい」「身体を丈夫にする」といった項目から成る『身体運動』因子、第五因子は「友達からの誘い」「このクラブで行う種目に興味を持っていた」といった項目から成る『周辺要因』因子にそれぞれ集約できる。

一方「有休群」をみると、第一因子には「友人やクラブの仲間と一緒に楽しむことができる」「このクラブで行う種目に興味を持っていた」「仲間との交流」「気晴らし・楽しみ」といった項目から成る『遊戯交流』因子、「レク・スポ協会の教室主催事業への参加」「家族からのすすめ」「クラブ活動の見学や体験入学」「芦屋市などの広報誌等による案内」といった項目から成る『外的情報』が第二因子に存在した。第三因子には「試合や発表会に出場する」「身体を動かしたい」「技術の向上」といった『行動誘因』因子、最後に第四因子は「友達からの誘い」「身体を丈夫にする」といった項目から成る『運動交流』因子として集約できる。「クラブへのアプローチ要素」について「無休群」で構成されている要因が『外的情報』『人的交流』『技能発展』『身体活動』『周辺誘引』という5つであったのに比して「有休群」では『遊戯交流』『外的情報』『行動誘引』『運動交流』の4つで成立していた。前述した「クラブ活動への積極性」についても、多様な「クラブへのアプローチ要素」を背景に、さまざまなクラブライフの過ごし方を認めつつ活動を楽しんでいる状況を「参加状況」の違いで確認することができよう。本稿では、「活動年数」と「参加状況」との関係に言及していないため、この観点からの分析が必要となろう。

3-2. 「複数加入群」と「単一クラブ群」

「加入しているクラブの良いところか何ですか?」の18項目について「複数加入群」と「単一クラブ群」の違いによるクロス集計を実施した(χ^2 乗検定)。「活動種目以外の行事がある」「いろいろな目的を持った人と活動ができる」「所属しているクラブ以外の人との交流がある」「クラブの仲間と食事や会話を楽しむことができる」といった4つの項目について有意な差が認められ、「複数加入群」の特徴を示唆している。

「参加状況」と同様に「クラブへのアプローチ要素」の平均値を「複数加入群」と「単一クラブ群」ごとに算出し平均値の差の検定を行った。13項目の中で「気晴らし・楽しみ」「クラブ活動の見学や体験入学」につ

いては、「単一クラブ群」の平均得点が高かった。有為水準を満たす差異が認められた項目は、「仲間との交流」「身体を動かしたい」「このクラブで行う種目に興味を持っていた」「友人やクラブの仲間と一緒に楽しむことができる」「芦屋市などの広報誌等による案内」「レク・スポ協会主催教室行事への参加」について「複数加入群」が「単一クラブ群」に比して高い値を示した。複数のクラブに所属する人々は「身体を動かしたい」「仲間との交流」を目的にし、クラブ活動に関する情報収集に積極性が見受けられる結果と受け止めることができそうである。

「クラブへのアプローチ要素」に関する構成因子を抽出した結果、「複数加入群」では5つの因子、「単一クラブ群」では4つの因子に集約された。「複数加入群」では「芦屋市などの広報誌等による案内」「クラブ活動の見学や体験入会」「レク・スポ協会主催教室行事への参加」「家族からのすすめ」といった「入会のきっかけ」の4つの因子から構成される『外的情報』因子が第一因子となり、第二因子には「技術の向上」「試合や発表会に出場する」という『技能発展』因子に集約された。第三因子では、「友人やクラブの仲間と一緒に楽しむことができる」「気晴らし・楽しみ」「仲間との交流」の3つで構成される『人的交流』因子としてまとめ、「友達からの誘い」「身体を動かしたい」という2つの因子が存在する第四因子は、『活動交流』因子とした。第五因子は、「身体を丈夫にする」「このクラブで行う種目に興味を持っていた」から成り『運動誘因』因子とすることとした。「単一クラブ群」では、第一因子を「友人やクラブの仲間と一緒に楽しむことができる」「このクラブで行う種目に興味を持っていた」「仲間との交流」「気晴らし・楽しみ」「技術の向上」から成る『目的意識』因子とし、第二因子は、「レク・スポ協会主催教室行事への参加」「家族からのすすめ」「芦屋市などの広報誌等による案内」「クラブ活動の見学や体験入会」から成る『外的情報』因子、第三因子は「友達からの誘い」「試合や発表会に出場する」から成る『集団形成』因子、第四因子は、「身体を丈夫にする」「身体を動かしたい」から成る『健康創造』因子として集約した。クラブへの加入状況による違いは、自己実現をクラブに求めず、さまざまな余暇活動の中から表現しようという意識がみられる。

4. まとめ

本研究では、兵庫県芦屋市のレクリエーション・スポーツクラブを事例に、クラブ員の「参加状況」「加入状況」の違いからクラブ活動に対する行動意識の背景を探ろうとした。更なる継続的な分析と同一クラブ員への調査を行い、クラブづくりの方向性やモデル事業からの影響を考察する必要性を感じる。総合型地域スポーツクラブにうたわれる「いつでも・誰でも・気軽に」を実現するためには、既存クラブの良さに学ぶところは少なくないであろう。特に「気軽に」という意味は重要な要素であり、「気軽に休むことができる」「気軽に入会できる」「気軽に復帰できる」というスタイルを育み守る必要があろう。

わが国のスポーツやレクリエーションを囲む環境づくりには官主導という風潮が弱くない。スポーツやレクリエーションに関わる指導者養成においても「資格の付与と活動の場」という観点から提起されてきたが、「空から降ってきたクラブ」に魅力や将来がないことに気付かなければ、レクリエーションの場としてのクラブは存在しないのではないだろうか。自主的・自発的な活動者が集い考え、自ら楽しむことのできるクラブを作り上げていくシステムが、わが国のクラブ文化の発展と地域住民のクラブライフを創造する鍵となることを、改めて確認する必要がある。